Museum News

絵：柳田 基

2022 展覧会

企画展

美術と文芸シリーズ

新収蔵品 洋画家
大森啓助コレクション展

2022.10.17㊊▸12.17㊏

※詳細は２、３ページをご覧ください。

平常展

関西学院と原田の森
ー学院の誕生と発展：1889-1929 ー

2023.2.20㊊▸4.22㊏

学院創立の地・神戸の東郊、原田の森（現在の神戸市灘区）にキャンパスが置かれた約40年の歴史をご紹介します。アメリカとカナダ、日本の人びとが協力して学院を築いていく様子を、当時の資料からご覧ください。

関西学院と「美術と文芸」

在学生の大原美術館体験から

本通信が発行されるころ、大阪の中之島美術館と国立国際美術館では「具体美術協会（具体）」の大規模な企画展が2館同時開催という形で始まっているはずである。具体美術協会とは、1954年に芦屋で結成された現代美術の団体で、日本の戦後美術史においても重要な組織の一つとして評価されているものである。この具体を立ち上げたリーダーである吉原治良（1905-1972）が関西学院の出身であることは、それなりに知られたところであろう。とはいえ、それは「知る人ぞ知る」というような状況でもあり、例えば在校生のなかで、このことを知るものはかなり少ないのではないかと思われる（そもそも吉原治良や具体自体のことを知らない場合が大半だろう）。

それでも、その作品自体は学生にとっても眼をひかれるものであるらしい。私は、2020年度・2021年度と2年継続して、所属の専修（文学部地理学地域文化学専修）の野外学習の授業にて岡山県倉敷市の大原美術館を訪れた。その際に、もっとも印象に残った作品として複数の学生が話をしていたのが、吉原の「白い円」（1967年）だった。じつは吉原の作品のレリーフは、学内の新学生会館2階ラウンジの向かい合う壁面に掲げられており、そこを利用している学生たちは、吉原の「円」と日常的に接しているのだが、そのこともおそらくはあまり知られていない。それでも、大原美術館での出来事のように、学生たちは、その作品とはちょっとしたインパクトともに対面したりするらしい。

そのような状況を知ると、現役の学生らの世代であっても、情報を伝えることができれば、吉原や具体（具体のメンバーには、嶋本昭三1928-2013や村上三郎1925-1996など他にも関西学院の関係者がいる）、そしてそれらと関西学院との関係について関心を持ってくれるかもしれないということでもあるようである。

「美術と文芸シリーズ」が伝えられること

今期（2022年10月～）の企画展は、やはり関西学院の関係者（高等学部商科の卒業生）である洋画家・大森啓助（1898-1987）を特集したものである。その詳細は、展示や図録にゆずることとするが、上記との関係で触れておきたいのが「美術と文芸」という企画展シリーズについてである。本博物館では、2018年に「美術と文芸―関西学院が生んだ作家たち―Ⅰ」という企画展を開催し、関西学院にゆかりのある多くの美術家・文芸家らを紹介している。この企画も、大森の作品が本館に寄贈されたことを受けて、計画されたものであったが、そこで紹介されたのは、大森や吉原はもちろんのこと、神原浩、竹中郁、十河巌、寿岳文章、山田耕筰、稲垣足穂など、いずれも関西学院出身の（あるいはゆかりの）それなりの密度をもった芸術家らであった。今回はこの「美術と文芸シリーズ」の第2回目の企画展ということになる。今回の企画でも触れているように、関西学院は美術家・文芸家を養成するような専門課程を持つ教育機関ではない。それにも関わらずこれまでに見るべき芸術家を生み出してきたということには改めて注目して良い。もちろんそれは単に学院関係者を顕彰するということではない（そのようなこともあっても良いだろうが）。それよりもむしろ、阪神間モダニズム文化を育んだ神戸～西宮という場の持つ意味や関西を中心に展開するいくつかの美術運動などより広い文脈のなかにおいて、関西学院というアカデミズムの場が果たし得た機能や役割を検討する機会となり得るという点において、これは重要なトピックとなる（髙木香奈子「美術と文芸―関西学院が生んだ作家たち―Ⅰ　「個」と「つながり」」、『美術と文芸―関西学院が生んだ作家たち―Ⅰ』関西学院大学博物館、2018も参照のこと）。

『美術と文芸－関西学院が生んだ作家たち－Ⅰ』（2018年）図録表紙

そして同時に、こうした取り組みは、在学生をはじめとした近年の学生たちに、普段知るところとは少し違う形から、学院の広がりを示すこともできるだろう。その意味でも、「美術と文芸シリーズ」は、大学博物館の企画として大切な役割を担うものと認識している。今回は、そのようなシリーズの第2弾として大森啓助の画業を堪能いただけたらと思う。

（大学博物館長　濱田琢司）

開催中の企画展

美術と文芸シリーズ
新収蔵品

洋画家

大森啓助コレクション展

2022.10.17㈪ ▶12.17㈯
9:30〜16:30
※休館：日曜日、祝日（ただし11月3日㈭、11月13日㈰は開館）

【学芸員によるギャラリートーク】
日時：11月 2日㈬13:30〜14:00
11月18日㈮14:30〜15:00
会場：大学博物館展示室（時計台2階）
入場無料、申込不要

関西学院は美術・芸術などの創作についての専門課程を持ちませんが、卒業生のなかには在学中に芸術や文芸を志し、その道で活躍した人たちがいます。大学博物館は「美術と文芸シリーズ」という企画展で、創立から戦前期までの関西学院で青春時代をすごした作家たちを見つめます。シリーズ第2弾となる本展では、洋画家・大森啓助（1898-1987）の作品をご紹介します。

同窓の洋画家

商科から画家に

大森はコロリスト（色彩表現を重視し、その表現に優れた画家）と評され、昭和の洋画壇に貢献したひとりです。1898年に神戸で廻漕業を営む裕福な家に生まれた大森は商家の跡取りとして学ぶべく、兵庫県立神戸商業学校（現在の県立神戸商業高等学校）から1916年に関西学院高等学部商科へ進みました。ところが学院在学中に参加した絵画部・弦月画会（現在の弦月会）で洋画の世界に魅了され、進路が変わります。

絵画部・弦月画会　中央が大森
（『高等学部商科第5回卒業アルバム』1920年より）

卒業後は川端画学校で西洋画技法を学び、師事した金山平三（1883-1964）のすすめで1926年28歳のとき、パリに留学しました。この留学生活で大森は画家として開花し、フランス人女性のパートナーに恵まれ、数多くの友人を得ました。パリは、彼の人生に大きく影響する充実した時間を与えたのでした。

大森は1932年に帰国し、父親が渋谷に建ててくれたアトリエで制作に励みます。1941年には国画会会員になり、戦後まもなくの一時期などに出品のない時もありますが、1979年までほぼ毎年出品し続けました。『サンデー毎日』や『週刊朝日』、『政界往来』などの雑誌の表紙絵や挿絵も手がけたほか、画家としての知識と語学力を活かして美術書の翻訳や画人伝を精力的に執筆し、さらにフランスでの日々にまつわる多くの随筆を残しています。

学院の博物館として

大森啓助コレクション

大学博物館には2016年度と2019年度に大森作品が寄贈されました。どちらも当館が大森の卒業校・関西学院の博物館であることから実現したものでした。

家族ぐるみで大森と親しくされていた上村善治氏（1914-2014）所蔵の作品群が2016年度に寄贈されたことを契機に企画した展覧会が、本シリーズ企画の第１弾『美術と文芸－関西学院が生んだ作家たち－Ⅰ』（2018年）です。ここでは、大森をはじめ絵画や詩、小説などの分野で活躍した同窓の作家についてご紹介しました。この展覧会をきっかけに、同窓作家にまつわる新たな資料が寄贈されることもありました。

そして2019年度には大森の油彩画やスケッチなどを、その死までともに暮らした房子夫人（1929- ）から受贈しました。大森は関西学院出身の画家たちのなかで最初期の人物です。学院は彼が在籍したときの校地である神戸の東郊、原田の森（現在の神戸市灘区）から1929年に上ケ原へ移転しましたが、大森の卒業校に彼の作品が集まってきたことは意義深いことです。そこで本展では大森ひとりに焦点を絞り、新たに収蔵した作品を公開しようと考えました。

大森は1945年の戦災で渋谷にあったアトリエを焼失し、それまで描き溜めていた作品のほとんどを失いました。そのこともあり本展の作品はすべて戦後のものに限られています。戦後は困窮することもありましたが、日々を彩る趣味を作品に反映しながら制作を止めることなく生涯を過ごしました。

大森の作品からは、芸術と日々の暮らしを慈しむ画家の目線が感じられます。それは絵画制作と並行して大森がおこなっていた執筆活動のなかにもうかがえます。本展では2019年度に大学博物館に寄贈された作品とともに、それらに関係する彼の随筆に触れながら大森の横顔にもせまります。

最後になりましたが、本展の開催にあたり、ご協力を賜りました関係者の皆さまに厚くお礼を申し上げます。

展覧会の構成と作品

本展では大森啓助の油彩画25点とスケッチ等19点を展示します。
（制作年が推定であるものは「か」をつけて推定年であることを示しています）

Ⅰ 神戸からパリ、東京へ

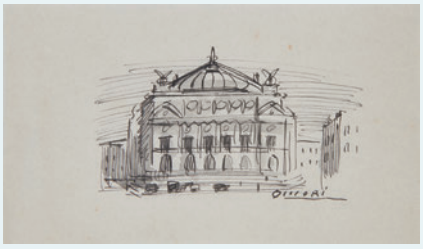
大森がすごした関西学院の原田の森キャンパスの様子と、彼が描いたパリや東京についての作品をご紹介します。

Ⅱ 写生旅行

日本での大森は信州や房総半島へ写生旅行をしました。大森の風景画には自然の形と色を楽しむ画家の目線があらわれています。

Ⅲ 暮らし

大森は花をよく描きましたが、その花々のほとんどは彼自身が育てたものです。戦災で失ったアトリエの焼け跡にプレハブ住宅を建て、庭いっぱいに草花を植えました。



画題不詳（オペラ座外装）　インク・紙　1947年

夕映え　油彩・キャンバス　1963年か

ポッピー　油彩・キャンバス　1970年代か

都会風景　油彩・キャンバス　1970年代か

夏の高原　油彩・キャンバス　1950年代後半か

葉げいとう　油彩・キャンバス　1970年代

房子夫人へのインタビュー

本展開催にあたり、作品を寄贈いただいた房子夫人に大森について聞き取り調査をおこないました。画家をよく知る方から、直接お話をうかがえる機会は大変貴重です。2022年6月13日（月）、興奮と緊張の筆者（学芸員）は東京丸の内キャンパスのランバスホールに向かいました。

夫人には大森の人柄や絵画に対する姿勢、交友関係、日常の様子を教えていただきました。歌舞伎鑑賞や園芸を楽しみ、それを描くよろこびも味わっていた大森の姿が立体的に浮かびました。また、大森は「世間知らずのお坊ちゃん」であることを気にする繊細な一面もありましたが、紳士的な振る舞いで画廊や友人との付き合いを大切にしていたそうです（夫人と訪れた銀座のレストランでは、彼のフランス仕込みのマナーがほかのお客様の目を引いたとのこと！）。

ここでおうかがいしたお話は本展図録所収の「大森啓助の画業と暮らし」にまとめました。ご覧いただけましたら幸いです。

本展図録 800円
（展示会場で
販売しています）

INTERVIEW

インタビューの様子

東京ご出身の夫人は日本銀行に長くお勤めされていました。同行で絵画部に所属され、指導者を探していたところ、大森を紹介されたことが２人の出会いのきっかけでした。

房子夫人（右）、
筆者（左）

当日はとても天気の良い日でした。貴重な機会をいただいたことを、ここに記して深く感謝いたします。

展覧会報告

平常展
学院を築いた 4 人の院長

2022年7月4日㊊～10月1日㊏
※休館：日曜日、祝日（ただし7月18日㊊、8月7日㊐は開館）、8月13日㊏～20日㊏

開館日数　69日

大学博物館では博物館を訪れてくださる皆さまとともに本学が歩んできた道のりを振り返り、未来を築く礎としたいと考えています。そこで、年に3回程度、学院の歴史をご紹介する「平常展」を開催しています。

本展では「学院を築いた4人の院長」と題して、現在につながる学院の精神的な礎を築いた創立者から第4代までの4人の院長（W. R. ランバス、吉岡美国、J. C. C. ニュートン、C. J. L. ベーツ）にまつわる資料をご覧いただきました。

関西学院と4人の出会い

学院の誕生と発展

アメリカ・南メソヂスト監督教会の宣教師ランバスは、伝道者の養成とキリスト教主義に基づく青少年教育をおこなうため、1889年、神戸の東郊、原田の森（現在の神戸市灘区）に関西学院を創立しました。この原田の森の土地取得に際し、法律上の土地所有権者のひとりとなって学院創立に貢献した吉岡は、創立の前年にW. R. ランバスの父から洗礼を受けた人物です。

創立時の学院には普通学部と神学部が設けられましたが、そのルーツは異なっていました。普通学部は1886年にアメリカ・南メソヂスト監督教会が設けた読書館（のちのパルモア学院）にさかのぼります。一方、神学部は東京のフィランデル・スミス・メソヂスト一致神学校（アメリカとカナダのメソヂスト教会による連合神学教育機関）からアメリカ人宣教師ニュートンが神学生を連れて合流したことがはじまりでした。

そして1910年、カナダ・メソヂスト教会が学院の経営に参画します。同教会のベーツは1920年に第4代院長となって、原田の森から現在のキャンパスである上ケ原への校地移転や、大学開設等の大事業にリーダーシップを発揮しました。

このように初代から第4代までの院長を俯瞰すると、3カ国の人びと――アメリカ人（ランバスとニュートン）、カナダ人（ベーツ）、日本人（吉岡）――が協力して学院を築きあげていったことがうかがえます。

会場で感じる

院長たちの姿

展示では、それぞれの院長ゆかりの品に当時の映像や音声を加えて、院長たちの姿を多面的にご紹介しました。また、校歌「空の翼」や三日月の形をした校章、スクールモットー“Mastery for Service”など、学院を象徴するものと彼らの関わりについてもご覧いただきました。

会場には大きな撮影スポット（右図）もご用意しました。4人の院長の等身大パネルの背景にある建物は、原田の森キャンパスの中央講堂です。1922年に建てられ、礎石には前年に亡くなったランバスの遺髪が納められました。学院行政の中枢機能をあわせもつ建物で、上ケ原キャンパスの校舎とは異なる煉瓦造りが印象的です。

本展はオープンキャンパス（8月6～7日）の時期に開催していたため、多くの方がこの撮影スポットで写真を撮ってくださいました。みなさまの思い出（と写真フォルダ）に4人の院長の姿が残ったならば、大変うれしく思います。

看板デザイン

会場の様子

撮影スポット

関西学院大学博物館通信 第 13 号
KGU MUSEUM NEWS No.13
2022.10.20
関西学院大学博物館
〒 662-8501
西宮市上ケ原一番町 1-155
TEL 0798-54-6054　FAX 0798-54-6462
URL https://www.kwansei.ac.jp/museum